

くじら日記

太地町立博物館から



「太地にふさわしいのは、クジラにより特化した施設を指すこと」

千葉県ちばの鴨川シーワールドから招聘され、副館長も務めたベテラン飼育員の桐畑哲雄氏は本紙の取材でこう述べました。2004（平成16）年、三軒一高氏が太地町長に就任して以来、組織の見直しや意識改革を進めるなかで考え出した鯨類飼育の「進むべき道」について語ったものです。

この頃、くじらの博物館には、鯨類以外にトドやオタリア、ゴマフアザラシ、そしてラッコなどの海棲哺乳類が展示されていました。それぞれ飼育の歴史は長く、来場者にも愛され、その役割を果たしてきました。ただ、一般的な水族館施設との差別化が曖昧だったことや、動物展示の目指す方向性を改めたことから、これらの飼育に幕を下ろすことになりました。

一方で、力を入れたのは鯨

鯨類飼育の変遷⑩



海洋水族館マリナリウムにおける希少な小型鯨類の飼育展示（平成31年撮影）

9種を観察 唯一無二の存在に

類の飼育でした。当時、町内まちうちの追い込み漁ではコビレゴンコビレゴン、オキゴンドウ、ハナゴンドウ、バンドウイルカ、カマイルカ、マダライルカ、スジイルカが捕獲されていました。その7種全て展示する

すなわち、イルカ飼育の業界では「一手を出すな」とも言われ、これまで飼育できていなかったスジイルカの飼育にも取り組むことになったのでした。さらに、2017（同29）年には、カズハゴンドウとシワイルカが捕獲対象に加わり、目標は9種に増えました。どの鯨類も、種が異なれば飼育に必要な要件は微妙に異なり、一筋縄とはいかず、試行錯誤が繰り返されました。

その過程で、残された記録や記憶にふれることができ、関わってきた人々の「太地」と「鯨類飼育」への強い思いを肌で感じました。同時に、その思いこそが、今の鯨類飼育をかたち作る道標になっていたのだとも気付かされました。くじらの博物館の鯨類飼育は、この先も太地にしかできないことを追求していきます。

（太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹）